

この人のセンスは注目

取材・文/井口啓子 写真/武藤晋子



「マンボにジャズ、エスニック、あと演歌もスキ」という彼。このCDは右のジブシーギターを使ったジブシー・スウィング。雰囲気は1930~50年代のトーキー映画のサントラ

時計は70年代物のデッドストックのデジタルを愛用。「すぐ狂ったり止まったり、手間はすくなく掛かるけど、そこがまたカワイイ」なんて、時計も女の子と一緒にですかね?



ロスのお宿屋で無造作に売られていたこのシャツ。1900年代初頭くらいのもので、レプリカではなく本物なら博物館行きの貴重品! 先住民のハンドメイドで伝統的な柄が特徴が見事



PROFILE

クリストフ・ローロンさん
(31歳)
四条河原町下ルの古酒屋「プラスチック・ジーザス」を友人と共同経営する彼。20歳の時にフランスからアメリカに渡り、古着バイヤー業に携わった後、念願のマイショップを開くべく京都へルックスはフランス人らしくジェントル。しかしそのしゃべりは見事にアメリカン...



50年代の企業プロモーション用に作られたパナダをコレクションしているクリストフさん。企業名がリッチリ入ってるのたまらなるとか。ただいま約30枚を収集中



クリストフさんが「マイ・ラブ」と大層にしているジブシー・ギターと呼ばれるジャズギター。ずっと探して4年前ある店からやっとゲット。以来、いつも一緒に寝てきた時の興奮は忘れられない

Old things have soul! 永遠のアメリカを夢見て...

「服だけでなく、音楽でも街でも古いもの、古い魂を持ったものが好き。オールドシングス・ハウ・ソウル。だから見ただけでこれを持つてたのはどんな人でどんな街で...というのをイメージレーションできる。それが楽しい」さすが、単なるレトロおたくではないのだ。「古着とかのことを「ユーズド」と言いますが、僕は「プレオウンド(前に持ち主がいた)」という言葉を使いたい。何故ならそこに様々な人生が宿ってるから」なんて話す彼は、やはり永遠なる未知の地に思いを馳せる、ステキなロマンチストである。

そのアーリーアメリカンを、趣味から、てっきりアメリカ生まれかと思いきや、実は生粋のフランス人男性であるクリストフさん。「若い頃はフランスのものも身近すぎて全く興味が沸かなくて。50年代のアメリカンムービーとか観て、いわゆるアメリカンドリムの世界に憧れてました」。なるほどフランス人ならではのアメリカ大陸趣味というか、土臭いながらも洗練された雰囲気を持つ彼に思わず納得。



よくメキシコ映画なんかで男の人が肩からかけてるアレです。正式名称はセラベ。中でもこれらは天然繊維・染料を使ったかなり昔のもので、絶妙な色遣いに古きロマンを感じる

店内にはサイケなヘッド、メキシコ名物のドクロ飾りなどがあふれ、メロディが流れ出す。その隣、無造作にカーテンを仕切られた着室で、行くクリストフさん。なんでもここ一番お気に入りの場所なんだとか。なるほど、頭の上には店の守り神、ジーザス・クライストが、ちなみに店は共同経営者三カ目交社。彼は6月に再び帰京予定です。ぜひお立ち寄りください。



ここに行けばこの人に逢える!!

四条通
高島屋 阪急 地球屋
河原町通 幸徳銀行

プラスチック・ジーザス
京都市下京区四条河原町下ル三丁目
東入ル柳川ビル1F・B1F
☎075-365-7767
●12:00~20:00/無休